

J.S.バッハの作品

パルティータ 第1番

バッハは1726年からパルティータを個別に出版していき、1731年に全6曲をまとめて出版した。第1番冒頭の短い「プレリュード」は、3声へと発展する。それに続くのは、イタリア風の陽気な「アルマンド」。さらに、3連符のリズムで突っ走るイタリア式の「クーラント」、旋律の豊かな装飾性が際立つ「サラバンド」と来て、軽やかな2声の「メヌエットⅠ」と、ミュゼット風に凝った4声の「メヌエットⅡ」が交錯する。終楽章の「ジグ」はイタリア式で、D.スカルラッティの特技だった、腕の交差テクニックをはじめて披露した楽曲。

パルティータ 第2番

パルティータの導入楽章はそれぞれ異なった名称を持っている。第1番が古典組曲の定型だったのに対し、第2番以降はいくつかの点でそれが破られている。第1楽章は「シンフォニア」。元来はイタリア・オペラの序曲を指すが、ここではイタリアとフランスの融合が見られる。付点リズムの悲愴感あるフランス序曲で始まり、アリアのようなアンダンテを経て、最後は急速なフーガとなる。続いて落ち着いた品のある「アルマンド」、フランス型の「クーラント」、サラバンド的なリズムを感じさせずに、淀みなく進む「サラバンド」を経て、活気あふれる「ロンドー」、対位的に展開される「カプリッチョ」と、最後には舞曲でない2曲が置かれている。

半音階的幻想曲とフーガ

作曲年代は定かでないが、おそらくケーテン時代の1719年頃に作られたものとされる。バッハのクラヴィーア作品のなかでも人気がある曲で、演奏機会も多い。「幻想曲」と「フーガ」の2つの部分からなり、「レチタティーヴォ」と記された「幻想曲」の後半ではめまぐるしく転調する。「フーガ」は半音階的な書法による三声のフーガとなっている。

パルティータ 第6番

冒頭の「トッカータ」は、本来の意味である「即興的楽想～フーガ～即興的楽想」という三部形式を踏襲している。アルペジオからの自由な即興に挟まれた3声のフーガで、雄大な前奏曲のようだ。それに続くのは、装飾的に彩られた「アルマンド」。「クーラント」は、ヴァイオリン・ソナタの原曲を想わせる

急峻な曲。そして、軽快な「エア」を経て、第 5 楽章「サラバンド」は、フランス風を乗り越えた悲愴美の極致を示す。「テンポ・ディ・ガヴォット」は、本来のガヴォットからは離れたスピード感がある。曲を締めくくるのは、対位法をつくる主題が大胆に展開され、低音の動きに旋律が感じられる「ジーク」。